新書紹介

苦海浄土

<わが水俣病>

石牟礼道子著

講談社　四六版　294頁

460円

水俣住民の怒りと苦しみ

水俣病とは，新日本窒素水俣工場の排水に含まれるメチル水銀化合物が魚貝類に蓄積され，これを食べることによって起る水銀中毒で，中枢神経が侵され，手足のマヒにより歩行困難となり，目や耳が不自由になり，知能障害をともない，ついには死にいたり，死をまぬがれても廃人となってしまう恐ろしい病気なのです。

昭和28年に第1号患者が発生して以来，15年目の昭和43年9月に政府はやっと水俣病を「公害病」と認定し，工場排水が原因であることをあきらかにしましたが，それによってはこの事件はなんら解決の方向へ向っていません。本書には生活を破壊され，死に追いやられ，さらにこの社会からも抹殺されんとしている漁民たちの孤独な戦い――病苦との戦い，生活苦との戦い社会との戦いが著者の患者およびその周辺からの見聞を中心に土語をまじえた文章で克明に記されています。たとえば，「安らかにねむって下さい，などという言葉は，しばしば生者たちの欺瞞のために使われる。このとき釜鶴松の死につつあったまなざしはまさに魂魄この世にとどまり，決して安らかになど往生しきれぬまなざしであったのである。……この日はことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に，耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような，魚のような瞳と流木じみた姿態と，決して往生できない魂魄は，この日から全部わたくしの中に移り住んだ」という著者の言葉の中には，うかばれることなく故郷の地に立ち迷う生霊，死霊を自分のうちにしっかりと宿して，漁民の苦しみをみずからの痛みとしてとらえていこうとする姿勢がはっきりあらわれ，単に第3者的立場で書かれた無味乾燥な興味本意の記録でも，読者の感傷に訴える物語りでもなく，強烈に読者に訴え，問いかける迫力をもっています。

「人間は死ねばまた人間に生まれてくっとじゃろか。うちゃやっぱり，ほかのもんに生まれ替わらず，人間に生まれ替わってきたがよか。うちゃもういっぺん，じいちゃんと舟で海にゆこうごたるもん。うちがワキ櫓ば漕いで，じいちゃんがトモ櫓ば漕で。漁師の嫁ごになって天草から渡ってきたんじゃもん。うちゃぼんのうの深かけんもういっぺんきっと人間に生まれ替わってくる」

生活基盤を根底から崩され，あらゆる生活能力を剝奪された患者のあらんかぎりの力をふりしぼっての生への執着に対して，悲惨な病状を詳細に記したカルテは解剖台の冷たさしかもちえず，また工場の生産工程やその排水を科学的に調査分析することは一向にせず，会社側の意見をうのみにし，一方では漁民の生活をすみずみまで全部さらけだして，なんの結論も得られない，いわゆる専門家の科学的調査報告はすべてそらぞらしく，患者の熱い叫びに対して冷たく背を向けるのです。それらの調査団報告はあたかも客観公正な立場を装うのですが，なんら水俣病を救うものにならず，患者の叫びの前に，その加害者側の立場を暴露してゆくのです。

ここまで追いつめられている漁民に対し，日本窒素という地域独占の企業で育ってきた水俣市民は，「水俣病を言うと会社がつぶれる」，「水俣病患者111名と水俣市民4万5千とどちらが大事か」といったいい方で水俣病をタブー視し，形なき迫害を加え，無視しようとする。

会社はいうまでもなく労働組合までも漁民を暴徒呼ばわりし，自分こそ被害者というような顔をして，「会社を守れ！」と労使一体となって，それまでかかげていた「地域社会との密着した運動」のスローガンを，あっけなくおろしてしまうのです。水俣病事件をきっかけに企業の地域社会破壊の犯罪があきらかになるのは当然のこととして，漁民の叫びの前に，平時は資本主義打倒を唱える労働組合も企業内組合の限界をはっきり露呈し，企業によって育てられた市民の正体もあきらかにされるのです。さらに，一見，客観，中立を装う科学者も会社側の犯罪をうやむやにし，隠蔽することによりその犯罪性を暴露し，この事件にかかわるもので客観，中立な第3者的立場に立てるものはまったく存在しないことを読者にまざまざと見せつけ，その漁民の叫びは，これを読む私たちに深く突き刺さってくる。私たちは漁民の悲惨な状態をみて，ただかわいそうだといってなんのかかわりあいももたずに生きてゆけるのだろうか。水俣病は偶発的事件ではなく，日本資本主義の発展の当然の帰結として，典型的に生じた事件であり，その中に，被害者，企業，市民，労働組合の関係を縮図として見いだすからには，私たちも避けて通ることはできないのではないでしょうか。日本の資本主義企業は明治中期，足尾銅山の鉱毒事件に端を発し，昭和初期には，朝鮮，満州においていろいろな形で辺境の村落を破壊してゆき，著者が指摘するとおり，「水俣病事件もイタイイタイ病事件も足尾銅山鉱毒事件の谷中村滅亡後の70年を深い潜在期間としてあらわれ」，「わが資本主義近代産業が体質的に下層階級侮蔑と共同体破壊を深化させてきたことをさし示す」のです。

水銀中毒，カドミウム中毒といった症状をともなわなくとも，資本主義は，国および自治体の地域開発，都市開発の美名のもとに，全国津々浦々に，大都市周辺に進出し，公共団体と一体になって農民，漁民を札束で追いたて，地域社会，共同体を破壊しつづけているのです。こういった都市化，開発現象に私たちは決して無関係ではなく，都市の魅力を享受し，消費文明を謳歌している私達，地域開発，都市開発をすすめている私たちは，水俣病事件をみずからの問題としてとらえ，自分のとるべき立場をはっきり認識する必要があるのではないでしょうか。そんな意味でこの本は私たち読者に公害問題の恐しさ，深刻さをあらためて教えてくれると同時に，他人事ではなくごく身近かな問題としての重大さを喚起し，私たちにやり場のないいきどおりを起させます。

なお，参考文献として，字井純著「公害の政治学」-——水俣病を追って——<三省堂>，「水俣病裁判支援ニュース・告発」および富田八郎著「資料・水俣病」<水俣病を告発する会・発行>などがあります。

<池田武文・企画調整室>

あとがき

わたくしたちをとりまく廃棄物は，数多くしかも生命の危険をはらんで存在しています。それは処理をうまく行なうことによって解決できるものから，人間存在の根本に立ちかえって考えていかなければならぬものまでをふくんでいます。

本号では，まずそれら廃棄物の現状が本市においてはどうなのか，どう処理されているのか，さらに基本的な考え方はどうあるべきかをあきらかにしたいと考えました。その上で，読者がそれぞれの立場で，今後とりくむべき方向や新らしい視点をあらためて考えていただきたいと願うものです。

なお，新書紹介の「苦海浄土（くがいじょうど）」はあまりにも有名になりすぎており，すでにお読みになった方も多いと思われますが，廃棄物関連の本として，あえて紹介いたしました。<M>

調査季報

27

1970年11月20日

編集・発行——横浜市企画調整室

横浜市中区港町1—1

印刷——有限会社　宮村印刷所

横浜市南区永楽町2—22